

ゼミナールの授業外活動と教員の専門分野との関係

伏木田稚子(首都大学東京)

キーワード: 大学教育, 学習環境, 質問紙調査

問題と目的

昨今, 多くの大学で, 入学当初より基礎ゼミナールや初年次ゼミナールが実施されている。主に3年生から始まる卒業研究を見据えた専門ゼミナールとは, 形式や様相が異なるが, 自ら問いを持ち, 深く考える学びが重視されている表れといえよう。南田(2011)はゼミナールについて, 知識をつける目的に留まらない時間と空間を与えるが, メンバー各自が考えて動かない場合, その空間は無機質なものになってしまうと指摘する。

ゼミナールに関する実証研究としては, 教員による授業構成が学生の汎用的技能に与える影響の検討(伏木田ほか, 2014)や, 先輩一後輩間の協同プロセスに関する考察(山田, 2011)が挙げられる。ゼミナールは少人数での共同体的な学習環境であり(伏木田, 2017), 授業内ですべてが完結するわけではない。そうした観点から先行研究を捉え直すと, ゼミナールの授業外に焦点を当て, 実態を広く調査する試みは行われていない。

そこで本研究では, ゼミナールにおいて設定されている授業外活動の現状を明らかにした上で, 教員の専門分野との関係について検討した。

方法

調査手順 東京都内に本部が所在する大学のうち, 人文学, 社会科学, 総合科学系学部にも所属している教員(専任講師以上)約14355名のうち, 525名を系統抽出した。学部2年生以上が対象のゼミナールについて, 当該年度の状況を回答するよう求めた。調査の期間は, 2015年2月下旬~3月下旬までとした。

調査項目 年齢, 性別, 専門分野(人文学, 社会科学, 総合科学), 初めてゼミナールを担当した年齢, 対象学年と人数, 学習テーマのほか, 授業外活動の設定の有無などから構成した。

分析方法 「そのゼミナールでは, 授業時間外にどのような活動を設定しましたか?」という質問に対して, 計12の活動それぞれに5件法(1. 全くなかった, 2. あまりなかった, 3. どちらともいえない, 4. ある程度あった, 5. よくあった)で回答を求めた。

結果と考察

調査票一式を郵送した全体の約30%にあたる157名の教員より回答が得られた。重複回答や未回答などを欠損値として処理した後, 有効回答は

130名であった。性別については, 男性92名(70.8%), 女性37名(28.5%), 年齢は平均51.1歳($S.D.=10.4$), ゼミナールの経験年数は平均14.4歳($S.D.=9.5$)であった。

最も多く設定されていたのは, 平均3.4($S.D.=1.2$)の「ゼミコンパ(飲み会・歓迎会等)」で, 次いで平均2.7($S.D.=1.6$)の「学習活動が設定されているゼミ合宿」, 平均2.5($S.D.=1.4$)の「サブゼミ(学生が自主的に行うゼミナール・勉強会等)」と続いた。また, 教員の専門分野に関する分散分析の結果, Table 1に示した活動において主効果が有意であった。

F-Shaffer法による多重比較の結果, 例えば「OB・OGとの交流」は社会科学, 「地域との交流」は総合科学の平均値が, 他分野に比べて有意に高いことが示された。これらの結果から, 教員の専門分野はゼミナールの授業外活動の設定に少なからず影響を与えているといえよう。

Table 1 分散分析の結果

| | 教員の専門分野 | | | F値 |
|------------------|------------------|------------------|-------------------|-------------------|
| | 人文学 | 社会科学 | 総合科学 | |
| 学内でのレクリエーション | | | | |
| -スポーツ大会・学園祭への参加等 | 1.4 ^a | 2.1 ^b | 2.3 ^b | 3.7 [*] |
| ゼミナール単位での企業訪問・見学 | 1.4 ^a | 2.0 ^b | 2.0 ^{ab} | 2.3 [*] |
| OB・OGとの交流 | 1.9 ^a | 2.7 ^b | 2.6 ^{ab} | 2.4 [*] |
| 地域との交流 | 1.2 ^a | 1.8 ^b | 2.6 ^c | 5.3 ^{**} |

* 0.05 < p < 0.10, ** p < 0.05, *** p < 0.01

平均値の右肩に付した文字が横に見て同一の場合は, F-Shaffer法による多重比較の結果, 10%水準で有意差がないことを示す

引用文献

- 伏木田稚子, 北村智, 山内祐平(2014) 学部ゼミナールの授業構成が学生の汎用的技能の成長実感に与える影響 *日本教育工学会論文誌*, 37, 419-433.
- 伏木田稚子(2017) ゼミナールの授業外活動の重要性に対する認識——計量テキスト分析による検討 *日本教育心理学会第59回総会発表論文集* 554.
- 南田勝也(2011) 第1章 大学に入ったら。南田勝也, 矢田部圭介, 山下玲子(著) ゼミで学ぶスタディスキル。北樹出版, 13-19.
- 山田嘉徳(2011) 先輩後輩関係を指導単位とするゼミ制度の有効性に関する一考察: B&S制度における協同的な学びに着目して *京都大学高等教育研究*, 17, 1-14.

付記

本研究は, JSPS 科研費 26885022 の助成を受けた研究の一部である。ご協力くださった方々に深謝いたします。